

第2章 河内長野市の歴史と環境

第1節	自然・地理的環境	14
第2節	河内長野市の成り立ち	14
第3節	社会的状況	18



第1節| 自然・地理的環境

河内長野市は、大阪府の東南隅にあり、奈良県、和歌山県に接している。市域の面積は109.63k m²で、大阪府内では、大阪市、堺市に続き3位であるが、7割が森林（大部分は人口林）であり住宅地、耕作地の割合は相対的に少ない。

市域の地形をみると、東部には金剛山地が、南部には岩湧山を始めとする和泉山脈が連なり、中央部には加賀田丘陵が、西部には小山田丘陵が広がっている。そして、それらの間を流れる石見川、天見川、加賀田川、石川、西除川（天野川）の5つの河川に沿って主要な谷と河岸段丘が形成されている。古くからの居住地と耕作地の大部分は、これらの谷や河岸段丘上に位置し、それぞれ独自の歴史と文化が存在する。丘陵上には戦後に開発された団地が広がっている。

地形は、それぞれの地域でみられる地層・岩石と密接な関係がある。金剛山地は、領家かこう岩類からなり、和泉山脈では脊梁部に和泉層群が分布するが、山麓部では泉南層群と、金剛山地から続く領家かこう岩類がみられる。なお領家かこう岩類は、地表でみられない地域でも、市内全域の地下深くに広がっており、丘陵部では、その上位に大阪層群が重なっている。そして、河岸段丘は、上記全てより新しい時代の地層で構成されている。

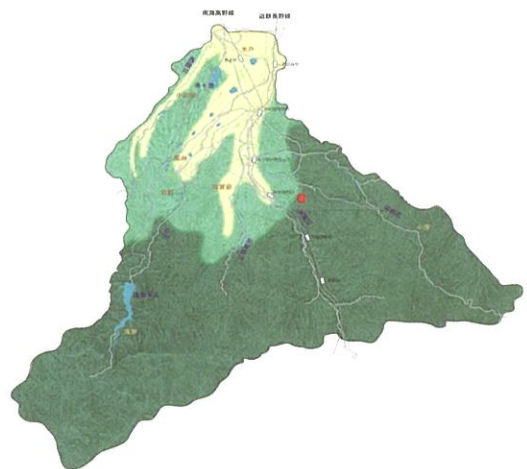
第2節| 河内長野市の成り立ち

河内長野市域は可耕地が少ないものの、豊かな森林資源があり、大和、紀伊、和泉が河内と境界を接する交通の要衝でもあった。このような地理的環境は、本市の歴史的発展にも大きな特徴を与え、平野部に位置する地域とは異なる発展の過程を認めることができる。

まず、旧石器時代～縄文時代にかけての遺跡数は、府内の他の市町村よりも多く、これは丘陵部に位置する本市域の特徴によるものである。旧石器時代の遺跡として高向遺跡、上原遺跡、三日市遺跡、寺ヶ池遺跡がある。縄文時代になると遺跡の数は増加する。縄文時代の遺跡としては、早期・前期の高向遺跡、三日市遺跡、三日市北遺跡、小塩遺跡、滝尻遺跡、上原遺跡、中期の三日市遺跡、宮山遺跡、太井遺跡、鳩原遺跡、後期・晩期の三日市遺跡、向野遺跡、喜多町遺跡がある。



第10図 河内長野市位置図



第11図 地形図(丘陵・河川)

弥生時代では平野部におくれて中期以降に集落が発展する。大型の集落で内容が比較的明らかになっているものとして、三日市北遺跡がある。三日市北遺跡では、竪穴住居跡38棟が検出されており、中河内地域の生駒山西麓産土器が多量に搬入されている状況が確認されている。また、このような様相がみられる遺跡は石川流域沿いに多く、本市に接する和歌山県北部でもみられる。後の高野街道に類似する道がすでに成立し、物流ルートとなっていたことを窺わせる。この他、市内北部では石川流域の低・中位段丘上に錦町北遺跡、栄町遺跡、大日寺遺跡、汐の宮町南遺跡、市町東遺跡、市町西遺跡、塩谷遺跡がある。これらの遺跡では、いずれも弥生時代中期の土器が出土しているが、長期間にわたって存続した形跡はない。後期には、大師山遺跡が出現する。

古墳時代には、まず前期において首長墓であり、全長52mの前方後円墳である大師山古墳が出現する。しかし、市内では、これに続く首長墓の系譜はみいだせない。集落遺跡では、前期の三日市北遺跡、中期の三日市遺跡がある。古墳時代後期になると三日市遺跡が継続して営まれる他、付近の高位段丘上へも居住域が拡大し、新たに小塩遺跡、加塩遺跡、尾崎遺跡、尾崎北遺跡、西浦遺跡が市内南部の加賀田川の中位・高位段丘上に出現する。

古代には、本市域は河内国錦部郡の一部となるが、市域に集落遺跡は少なく、小塩遺跡、尾崎遺跡、三日市遺跡、喜多町遺跡など、古墳時代後期に出現した集落が古代においても断続的に営まれる。この他、新たに、石川流域で高向遺跡、野間里遺跡、向野遺跡などが形成される。なお、古代寺院が数多く営まれる南河内地域にあって、これが確認されてい



第12図 三日市北遺跡の土器



第13図 市内の荘園分布



第14図 大日寺遺跡の中世墓



第15図 観心寺境内図

ないのも本市の特色を示している。

中世には、一転して市内の遺跡は急増し、市内の大部分の遺跡で何らかの中世の遺構、遺物の検出をみている。このことは、土木技術の向上により河岸段丘面の耕地化が進んだことに加え、高野山参詣が河内路を使って行われるようになり、市域を経由した交通・流通が活発化したことに起因していると考えられる。また、当時、市域には藤原氏系の荘園である法成寺領長野庄が置かれ、観心寺や金剛寺も興隆した。集落遺跡では、三日市遺跡、尾崎遺跡、上原北遺跡、向野遺跡、寺元遺跡、大日寺遺跡の調査で比較的広い面積からまとまった量の建物等の遺構が検出されている。また、寺社や城郭跡も本市の中世の社会を特徴づける重要な要素となっている。

寺社では、多くの子院を従える真言宗系の一山寺院として、川上地区の観心寺、河合寺、天野地区の金剛寺、日野・高向地区の日野観音寺が隆盛した。これらの内、観心寺、金剛寺は高野山の僧侶によって、伽藍の整備がなされたものであり、中世末期には隆盛を極めた。両寺には、戦国時代の全盛期の様子を描いたといわれる絵図が残っている他、多くの中世の建造物と美術工芸品が伝わっている。これらの文化財は、市域で保有されている指定文化財の多くを占めている。また、天見地区には石清水八幡神社の所領である甲斐庄山郷が置かれ、そこから勧請された八幡神社が成立し、各地区にはそれぞれ特色ある歴史が展開した。

中世における本市域は治承・寿永の内乱期、南北朝期、戦国期の3時期に渡って戦乱の舞台となったため、中世居館の伝承地、中世城郭跡も多く残っている。これらには、曲輪、土塁、横堀が良好な状態で遺存する史跡烏帽



第16図 金剛寺境内図



第17図 国史跡烏帽子形城跡



第18図 絵図に描かれた三日市宿

子形城跡をはじめとして、石仏城、旗蔵城でも城郭の遺構が確認できている。

近世に入ると市域は、天領、旗本領や近江膳所藩、和泉陶器藩、河内狭山藩などの飛地領が置かれ、中世に続き市域が政治的に一体化することはなかった。中世に全盛期を迎えた観心寺、金剛寺は多くの寺領を失い、境内の堂宇や子院も減少した。なお、本市に拠点を置いた藩は当初存在しなかったものの、膳所藩から分封した河内西代藩(1732年以降は、転封により神戸藩)が延宝7年(1679)から享保17年(1732)にかけて存在した。

延宝7年(1679)に刊行された河内鑑名所記や享和元年(1801)に刊行された河内名所図会、あるいは嘉永6年(1853)に刊行された西国三十三所名所図会に中世に発展した本市の寺社が多く描かれており、観光地として栄えた本市域の様子を伝えている。また、高野山参詣は近世に至って民衆へも浸透し、本市には高野街道三日市宿が置かれた。三日市宿は、高野山参詣の中継地として栄え、多くの旅籠で賑わいをみせていたことが知られており、現在でも旅籠を踏襲した建物が残っている。

なお、近世の市域の様子については、河内名所図会、境内図、村絵図などの絵図によって詳細を知ることができる。

近代になっても観光のまちとしての状況は引き続き、昭和10年に吉田初三郎によって描かれた鳥瞰図は観光地としての賑わいを伝えている。また、大きな戦災にあっていないことから近世・近代の建築物も多く残り、長野地区や三日市地区の中心市街地にもこの時期に建築された民家が残っている。鋳物業、酒造業、凍豆腐生産、爪楊枝生産その他、豊



第19図 旧三日市宿の風景



第20図 鬼住村絵図



第21図 吉田初三郎の鳥瞰図



第22図 河内長野市指定文化財
旧三日市交番

富な河川を利用した水力による産業も盛んであった。市内には多くの産業用の水車が造られ、一部が残っている。また、役場庁舎、学校講堂、駐在所などの公共施設に加え、旅館、営業所には、一部に洋風の技術や意匠を取り入れた近代建築が建てられた。

第3節| 社会的状況

本市は、昭和29年4月1日に、1町5村が合併し誕生した。昭和40年代以降に進んだニュータウン開発により人口は増加し、ピーク時の平成12年2月末では123,617人であった。しかし、それ以降人口は減少を続け、平成26年3月末時点で111,683人となっている。生産年齢人口（15～64歳）をみると、平成12年度末において69.7%であったのが、平成25年度末には、59.9%となっており、9.8ポイント減少している。昭和40年代以降に急激な人口増加を迎えた本市にとって、この時期に転入した人口の高齢化によりこの傾向は今後も継続することが予想される。昼間人口をみると、平成22年の国勢調査では82.2%と低い値となっており、大都市近郊のベッドタウンとしての本市の性格を示している。これらのことから今後は、高齢者を支える労働人口の定住と、まちの活力の維持と充実が課題となっている。

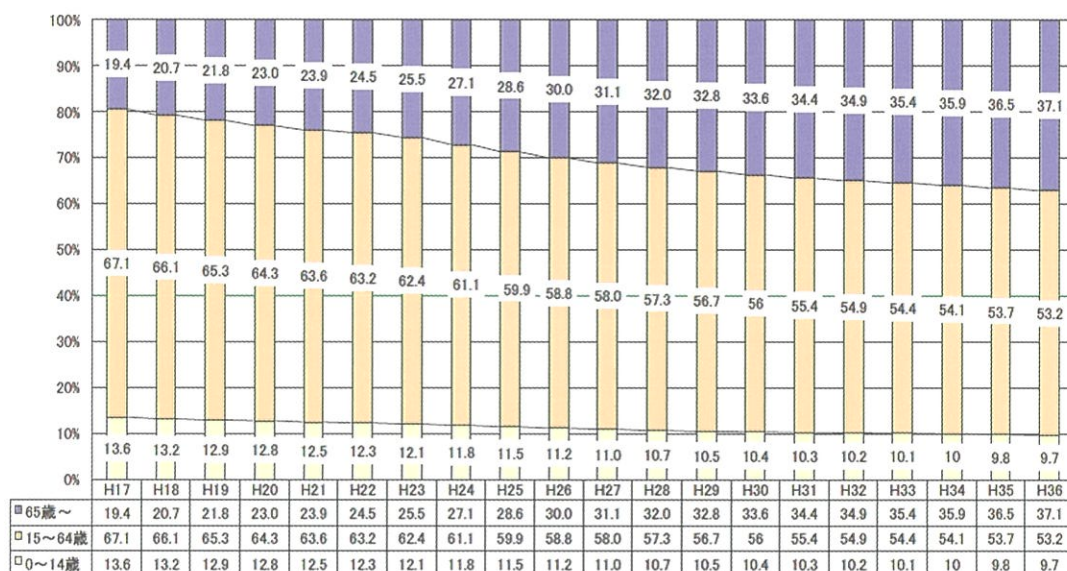
交通については、南海高野線と近鉄長野線が本市の河内長野駅で合流し、当駅は南海高野線の急行停車駅、近鉄長野線のターミナル駅となっている。年間乗（降）客数は、平成25年で13,377,242人であり、人口のピーク時であった平成11年の15,821,452人から減少傾向にある。

主要幹線道路としては、国道170号線、国道310号線、国道371号線がある。大阪府を南北に走る国道170号線は、富田林市から本市に入り、和泉市へ抜ける。大阪府と奈良県を繋ぐ国道310号線は、堺から大阪狭山市を経て本市に入り、奈良県五條市に通じている。両国道は、本市の原町で交差する。国道371号線は本市の本町で国道310号線から派生し、和歌山県橋本市へ通じている。このように、本市は大阪府、奈良県、和歌山県を結ぶ交通の要衝をなしている。

産業については、就業種別人口が平成22年の国勢調査によれば第1次産業が466人、第2次産業が9,284人、第3次産業が33,438人で第3次産業の割合が多いことが分る。

農業については、農業振興地域の多くが山間部で占められているため、農地が狭小で、傾斜地に作られている場所が多い特徴があり、農業の担い手の高齢化と後継者不足が進んでいる。一方で、市街地から比較的近い位置にも農空間が広がっているという特色もある。このような中、本市では、ほ場整備、農道整備、ため池・水路の改修などの基盤整備を進めてきた。

林業については、市域の約7割を森林が占めており、その大半が木材生産のために植林された人工林で、従来、林業は盛んであった。しかし、林業従事者の高齢化や長引く



第23図 人口の推移・年齢別人口の推移

木材価格の低迷、労働コストの増大などにより、近年の林業は大変厳しい状況が続いていることから、森林所有者の経営意欲が低下し、将来にわたって市域の人工林を健全な状態で維持していくことが厳しい状況となっている。森林は、木材生産機能以外に、二酸化炭素の吸収による地球温暖化防止機能、大気の浄化機能、水源涵養機能、災害の防止機能といった公益的機能を持つことから、多様な主体が参加して森林を守り育てていくことが必要であり、本市では市の施策としてこれを進めるために「かわちながの森林プラン」を平成18年度に策定した。

商業については、大型量販店出店などの影響もあり、中心市街地をはじめとした市内商業地において店舗数の減少、空き店舗の増加が進んでいる。

観光については、多くの神社、寺院、名勝を抱える本市においては、温泉旅館もあり古くから盛んであった。しかし、交通機関の発達とともに進んだ戦後のベッドタウン化により、観光のまちとしての色合いは後退している。一方で、現在でも大阪都心部から鉄道で30分程度の距離にあるアクセスのよさから日帰りレクリエーション客が多く訪れ、受け入れる側での観光ボランティア活動等も盛んである。このような社会的環境を踏まえると、本市の資産である歴史・文化を生かし、観光と連携した取り組み等が必要になっているといえる。

なお、日本や地域の古典伝統文化を受け継いだ市民活動が活発なまちであり、神楽、獅子舞等が継承されており、書道、華道、茶道、舞踊などの日本の伝統芸能をテーマに活動する団体が多く存在し、毎年秋に行われる祭礼や市民文化祭をはじめとする様々な場で、各団体による展覧会、披露会が開催されている。

